

京都大学総合人間学部広報

座談会

総人 STRIKES BACK - 学部新課程を問う -

2

研究・教育活動紹介

外国語獲得に近道はあるのか

中森 誉之（認知情報学系）

17

カメラ・オブスクラと不在の实在感

加藤 幹郎（人間科学系）

18

ブラックホールを造って“聴こう”

阪上 雅昭（自然科学系）

19

座 談 会

総人 *STRIKES BACK* - 学部新課程を問う -

総合人間学部は従来の4学科13講座制に代えて、平成15年度より1学科（総合人間学科）5学系（人間科学系・国際文明学系・文化環境学系・認知情報学系・自然科学系）の新しい教育課程を導入しました。そしてこの制度に基づいて、間もなく新課程1期生の主専攻学系への分属が行われようとしています。

しかしながら、制度改変の意義や新課程の特徴はどのようなものなのだろう、学系の違いがよく分からない、分属にあたってこれまでとは違うやり方が行われるのだろうか、など学生の皆さんが新課程に対して様々な疑問や不安を抱いているとの声を耳にします。そこで広報委員会では、それらの疑問や不安に答えるべく改革案の作成に携わった教官の方々による新課程に関する座談会を開催し、その記録を学部広報に掲載することを企画しました。この記事が、学系分属や卒業論文・研究のテーマの選択など今後の総合人間学部での勉学を進めるにあたって少しでも参考になれば幸いです。

この座談会を開くにあたり、その資料とするため1回生の皆さんに新課程に関する疑問等についてのアンケートを行いました。多くの方々のご協力にお礼申し上げます。

座談会には新課程の立案と運営に深く携わってこられた富田博之（評議員）、山田誠（前教務委員長）、元木泰雄（学生厚生委員長）、伊従勉（将来構想委員）、杉万俊夫（教務副委員長）、立木秀樹（将来構想委員）の各先生方にご出席いただき、岡真理（広報委員長）が司会をつとめました。教育・研究にお忙しい中、ご参加いただいた先生方に感謝申し上げます。

総人がなくなる！？

--- 新制度は具体的にどのようなもので、従来とどう異なるのでしょうか。改組の経緯も含めてお話しください。



富田 この総合人間学部は10年前の1992年にでき、総合人間学部の先生と人間・環境学研究科の先生と両方が学部を担当してきました。ほかの学部は、たとえば理学部なんかは理学研究科というのがあ

って、その先生がそっくり理学部を担当する、文学研究科というのがあってそこの先生が文学部を担当する。昔は逆だったんです。文学部の先生が文学研究科を担当するという格好だったんです。それが総合人間学部ができたのと同じ時期に、ほかの学部は大学院のほうに先生が移って、この学部だけは新しくできたもので、すぐにはみんなが大学院に移ることができなくて、教官の組織が総合人間学部と大学院（人間・環境学研究科）に分かれていたんです。それを今年度から合流しまして、人間・環境学研究科に先生方は全員移ったんです。

総合人間学部との関係は、理学研究科の理学部、文学研究科の文学部と同じように、人間・環境学研究科に総合人間学部があり、ここだけは名前がちょっと違うんです。それは歴史的に、人間・環境学研究科が先にできて、総合人間学部が1年遅れてできているといういきさつもあって、学部の名前と研究科の名前が違うけれども、それが一体となったものだと思ってもらいたらいいんです。だから、一時、受験界では総合人間学部がなくなるという話があったんですが、教官組織としては総合人間学部は確かになくなっただけですけども、学部組織はちゃんとあって、皆さんに入ってきてもらっているし、これからもずっと総合人間学部として学生さんを迎えます。だから、絶対になくなることはないということですので、その点はまったく心配

ありません。

1 学科 5 学系で幅広い選択を可能に

富田 この新制度でカリキュラムがどう変わったかということですが、この10年間やってきたのは、総合人間学部の中に、人間学科、国際文化学科、基礎科学科、自然環境学科と4つの学科がありまして、全部で23の専攻がありました。現在は学科は1つで、そのかわりに5つの学系があります。学系はほぼ今までの学科に対応すると思っただけなのですが、かなり違います。今までは学科と言いながら、2回生になる段階で23あった専攻に分かれてもらいました。総合人間学部で総合的な勉強ができると思って入ったら、1年で創造行為論とか計算理学とか、23の内の1つのどれかを選ばないといかんわけで、非常に狭い選択になっていました。それを少し広げて、1学科5学系にしまして、人間科学系とかありますが、今度2回生になるときにはその学系を選んでもらいます。学系の中で必要な単位を揃えてもらう。学部全体からでもいいという意見もあったんですが、まあ、それではちょっと広がりすぎるので、専門科目は一応学系の中から卒業単位は揃えてもらおうということで、学系という非常に広い範囲で揃えてもらったらよろしい。だから、23専攻あったのが、選択範囲は5つにまとめられた。ただし、その中でもたとえば哲学を主にやりたいとか、今までの専攻に対応するぐらいきちんと狭く専門を突っ込んで勉強したい人は、自分でコースをつくって行って、自分でそうした科目を集めて単位をとればいいんです。そういう専門的な勉強もできるし、より広い勉強もできるということです。

学部ができた10年前に何があったかと言いますと、大学の教育課程が自由化されました。大綱化とも言いますが、それまではどの大学も、学部教育、つまり学士の資格をとるには、一般教育科目を人文・社会・自然科学系列からそれぞれ3科目12単位、それから外国語科目を何とかとか、ピシッと決まっていたんです。それが10年前に設置基準が変わりまして、大学で自由にコースを組んでよろしいという制度に変わりました。それと同じ時期に、文学部とか理学部とかは先生方が大学院に籍を移すということが起こったんですが、どういう意味でこのような

自由化が行われたかと言いますと、現在の学問の発展段階から言いますと、大学4年間では専門教育を完成することはできない、つまり、大学の4年間はいわば高度教養教育だ、基礎教育だという位置づけでよろしい、専門教育は大学院でやるんだ、それで大学院に重点を移していくということが起こったんです。新制大学ができてからの40年間は学部が中心だったのが、このときから大学院が中心になったんです。だから、ある意味では、学部教育は高度の一般教育、高度の教養教育をやる段階である、そこで専門の入口を見つけなさいということになっていったんです。

それに対応してできたのがこの総合人間学部であったわけです。だから、ほかの学部では、それまでの一般教育科目、人文・社会・自然系列とかを踏襲して、今でもA群から何ぼ、B群から何ぼというような指定をしていますが、A群とかB群を提供しながら、この学部だけはそういう指定はしていない。そのかわりに、主専攻と副専攻を選びなさい、副専攻という形で教養科目をとって高度の教養を身につけなさいという格好で、全く今までの学部とは違う理念で出発したんです。だけど、その専門が、さっき言いましたように23専攻という非常に狭い範囲だった。せっかく総合人間学部でそういうものをめざしながら、1年たってみると非常に狭い範囲から選ばなければならない、その中で単位を揃えなければならないというジレンマがありました。学部ができてから5～6年たったときに在学生にアンケートをとりましたら、一番不満が出たのはそこだったんです。つまり、総合人間学部と言いながら、場合によっては理学部や文学部よりも早い段階に非常に狭い専門を選ばなければならないんです。理学部なんかは3回生に行く段階で専門を選べます。それは非常に大雑把で、物理系・化学系・数学系ぐらいですか、それぐらいのくくりで選べばいいんです。ところが、ここは23専攻ですから、理系でも文系でも非常に狭いものを1年たったら選ばなければいけない。「こんなもの総合人間学部じゃない」という答えがウワッーと返ってきたんです。

これはいけないということで、数年かけて見直していったわけです。途中で1回手直しはしておりますが、基本的には10年間それが続きました。今回、大学院化するのを機会に、1学科5学系、ゆるやかな学系の中で単位を揃えれば

よろしい、ただし、専門を突っ込んでやりたい人はその中で自分でコースをつくって専門コースを選ぶこともできるという形にしたんです。そこが大きな違いです。

そういう構造にしたということと、もう1つは、せっかく大学院に先生方の組織が全部移ったんですから、大学院の教官組織、講座組織に、できるだけ対応する格好で学系をつくりました。それまでは、総合人間学部、人間・環境学研究科という2つの部局で共同で担当してましたから、大学院の先生方の研究組織とは違う講座構成になっていました。そうすると、ある講座を出た学生が上に進もうと思ったときに、どこに進んだらいいかがなかなかはっきりしないということだったんですが、今はだいたい大学院の講座と学系のいろんな分野とは上下対応するようになっていました。これはほかの学部なんかは昔からそういう構造でできてますから、その点は改めて大学院と一体化したということです。

だから、重要な変更は2つありまして、先ほどの1学科5学系にしたことと、その構造を大学院の講座組織に対応するようにした、その2つが大きな改革だと思ってもらったらいいです。

総合人間学部の先生が全員人間・環境学研究科に合流したと言ったんですが、もう1つだけ重要な変更がありまして、理系の数学・物理学・化学の先生の一部というよりも、かなりの部分がこの機会に、学部担当はまだ続けてもらっていますが、籍は理学研究科へ移りました。それが25人ぐらいです。数学と物理の理論系、化学の一部、いわゆる環境学からはちょっと遠い分野ですね。その部分の先生が理学研究科に移った分だけ理系が少なくなったという構造の変化があります。

学系間はどう違うの？

山田 基本的には従来の4学科にほぼ相当するようなものとして5つの学系ができていますが、アンケートを読ませてもらって、学系相互の違い、特に文系の人間科学系、国際文明学系、文化環境学系の3つの間の違いがよくわからないということが書かれていて、確かにそうかもしれないなあという感じを持ちました。自然科学系は特色が非常にはっきりしていると



思いますし、認知情報学系もかなりはっきり特徴があると思います。あとの3つの学系は、そんなにどう違うかと厳密に考えていただかなくてもいいんじゃないかなという感じがしているんです。相互

に非常に密接に関係しています。だから、入学されたときに15年度入学者用の便覧をお配りしましたが、これだけでは少し情報不足だろうと思ひまして、かなり無理をして授業科目内容一覧、つまり15年度はまだ開講されない科目についても、どのような内容の講義あるいは演習なのかを書いたプリントをかなり泥縄式につくって、ぼくは昨年度後期教務委員長だったので、その責任なんです。お配りしてあるわけです。だから、もちろんこんな短い文章じゃちっとも中身がわからんと言われるかもしれませんが、それでも、ここに書いてあることをじっくり見てもらったら、自分がやりたいことがどのあたりに一番近いかということは、ある程度はわかってもらえるかなと思ってつくったんです。しかし、実際にはわからんというご意見もありのようで、わからんならわからんなりに、文系3学系、その中でどれを選ばれても、その中にかなり幅がありますから、それはそんなに大きな問題にはならないのではないかなという気がします。

転学系はできるの？

山田 それからこれもアンケートの中に質問事項としてあったんですが、途中で学系を変えることができるか、主専攻の学系と副専攻を入れ換えることができるかという疑問が出てましたけれども、従来の非常に細かい分け方のときでも、転学科あるいは転専攻は、ほとんど認められていました。ひょっとしたらほとんど理系の基礎科目をとってない人が理系に変わるの、あるいは断られたケースがあったかもわかりませんが、総人の中ではほとんど認められていたと思います。ただ、その場合、もちろん単位のとり方が多少変わってきますから、それまでにとった単位が、副専攻するには余る、

自由科目にももちろん入れられますが、それでも余っちゃって、その分新たな主専攻の単位をたくさんとらなくちゃいけないというようなことはあるでしょうけれども、それは3回生になるとき、あるいは相当単位をとってる場合だったら、3回生から4回生になるときでも、変わり得ると思います。少なくとも従来の総合人間学部では所属の変更はかなりゆるやかで、垣根が低かったと思います。ですから、特に今度の場合には、従来20いくつかの中から1つを選ばなきゃいけなかったのが、5つの中から1つを選ぶということですから、やりやすいんじゃないかなとは思ってます。

理系の場合だと、富田先生、どうでしょう。1・2回生で本来とっておくべき基礎的な科目を全然とってなくて、それで突然そう言われてもちょっと。

富田 その場合には、「2回生からもう1回やってくれますか」ということは要求します。似たような例で、農学部の人が2回生に転学部をしてくるときに、物理をやりたいからここに転学をしてきたいと言いながら1回生の間に物理をほとんどとってなかったのが、「もう一ぺん出直してきてください」と要求したら、大学に入り直して総合人間学部に入った学生さんがいるんですが、そういうふうに理系の場合にはある程度基礎を積んでくれないと、いきなりというわけにはいけないので、「2回生からやり直すのならいいよ」とか、単位のとり方によっては「3回生からでもいいよ」とか、それはケースバイケースで認めています。

今でも学科が変わる、もちろん学科が変わるということは専攻が変わることでありますが、それも3回生になるとき、4回生になるときに、認めていますよね。従来の申し合わせでは、基本は3回生になるときなんです。だから、3年終わった人が変わりたいと言ったら、本来は1年遅れるはずなんですけど、ある程度以上必要な単位をとってれば4回生にも認めることがあるというような、今はそういうやり方です。そこらを積極的に変えようという議論はあまり聞いたことはないです。

それから、主専攻のことですが、主専攻は5つの学系から選ぶわけですね。最終的に4回生になって卒業論文を、あるいは理系の場合ですと卒業研究という名前を使っていますが、その段

階で学系のなかで特定の先生につくことになります。従来は3回生の終わりのときに専攻の中のどなたかお1人の先生を、あるいは複数でもいいという所もありまして、1人ないし複数の教官を選んで指導教官にし、4回生はその先生あるいは先生方のもとで研究をする。おそらくというか、それは今回、改組をした段階でも、それを考えることはどこも考えていませんから、やはり3回生の終わりの頃、後期ぐらいの範囲だと思います。1月2月になるのか、11月ぐらいになるのかは、そこまでは確かなことは言えませんけれども、3回生の後半に卒論、卒業研究の指導教官を、所属している学系の中から希望する教官を選ぶということになると考えています。

学系はどう選ぶ？

--- 文系の学系選択にあたって、アドバイスいただけますでしょうか。



元木 たとえば山田先生はご専門が地理ですが、地理学には自然地理もあれば人文地理もある、人文地理は歴史と重なるし、自然地理は自然科学とも重なる。地理を勉強するにしても、どの方面から研究

するのか迷うということも起こると思います。学系の選び方も、それに似た面があります。

たとえば国際社会を考える場合、どのような学系を選ぶか。まず、国際文明学系の科目を見ていただければ、だいたいこの学系がどういう傾向の学問かというのはおわかりいただけると思うんです。一方では現代の政治学・経済学、あるいは国際政治といったこともあります。しかし、現代のことだけではなく、その背景にはどういうものがあるか、欧米の歴史・文化、あるいは欧米を相対化する東洋の歴史・文化というものを考える学問もある。理念の所に書いてありますが、現在我々がだいたいその中に身を置いている近代主義、これは欧米がつくったシステムですけれども、その問題を歴史的に、あるいはその現実を、さらにそれを相対化する

方法を考えるのが国際文明学なんですよ。

それに対して、たとえば文化環境学系を見れば、文化人類学とか社会学であるとか地理学であるとか、現代の社会の文化や生活習慣といった、国家とか経済とかいう大所高所よりも、さらに身近なところから国際的な目でものを見ていく学問が学べることになっています。国際社会を広く見るにはどちらがいいか、どちらも国際社会を広く見ることはできるわけですが、若干方法論が違ってくるだろうと思います。それは各学生諸君の関心によって違って来る。

しかし、たとえば文化環境学系に入ったら歴史のことをやってはいけないのか。そんなことは全然ないわけで、文化環境学系の中でも東洋史の分野もありますし、歴史的な見方をすることもできるわけですし、そういうふうには方法はちょっとずつ違いますけれども、他の学系と重なる部分においては、その学系の中でもケアできるようにはなっているわけです。最初からどの学系にするかというよりは、自分が何をやりたいかをまず考えて、そして学系を考えていただくほうがいいんじゃないかと私は思っています。

総人に定食メニューはない！



伊従 便覧の主専攻科目表で全学共通科目が並んでますよね。この科目を見ればだいたいこれは旧学問のジャンルですから、どういう学問がここに並んでいるかは自ずからわかるはずで

す。ただ、その内容は皆さん聞いたことがないと思いますので、それはちょっとずつ味見をしてもらわなくちゃいけないわけで、そのためにリレー講義という入門コースを聞いてもらっているわけです。

別にその機会だけに聞けなきゃいけないかというわけではなくて、思いついたときにその授業を聞いてみれば、内容の大体が想像できるだろうということです。だから、言ってみれば、どうせ卒業論文の指導教官をいつかは決めなきゃいけないんですけれども、それまでのオプションが非常に広いということです。人によって

はすぐ決めずに広くやることもできれば、特定の領域に絞ってそれだけをやっても卒業できる。オプションが広すぎて困ってるんだらうと思うんです。定食に近いものがない。レストランに入ってとにかく自分で全部オーダーしないとイケない。もし困ったら、これは富田先生か山田先生にお答えいただきますが、アドバイザーシステムというのが始まりますから、4回生になってからどうしようと言って駆け込むのではなく、2回生ぐらいから相談していただくのがいいんじゃないかと思います。しよせん教師はある学問をやっていて、ほかにも興味がある、そういう人たちがここに集まっているわけですから、早く相談することをお勧めします。

--- 1回生の授業は語学しか持っていない教員については、実際に分属して授業をとってみたいと分からないですね。

山田 そうですね。だからどういうことを研究しておられるのかということは、今日は持ってきませんでしたけれども、これも入学のときに各教官の自己紹介文をまとめたのを配ってあるんですが、その中で、「この先生は自分と波長があいそうだ」とか、「この先生のやっておられることが非常におもしろそうだ」というときには、直接行かれるなり、あるいはもちろん専門の授業をおやりになっているのだったら、履修登録はできなくても教室に顔を出して聴講してみるといったこともできるのではないのでしょうか。A群担当の者ですと、こちらから積極的に自分はこういうことをやっているというような広報活動しなくても、それは1回生向けの講義で十分やれている、あるいはある程度それでわかってくれるはずだという意識があるんですが、確かにC群あるいはB群の先生方だったらわかりませんよね。だから、そういう先生方は、あるいは特別に何か自分はこういうことをやってるんだということを、我々A群担当者以上に積極的にアナウンスをなさる必要があるのかもしれないという気はしています。

杉万 私も、先ほど伊従先生がおっしゃった全学共通科目のリストを見たほうがイメージがわかりやすいと思います。学部の授業名はかなりユニークというか、それを受けもっている先生の顔が浮かぶようなネーミングになってるんです

ね。その点、全学共通科目の名称は、どの学部の人が見てもイメージがわからないと困るので、割と従来の学問区分に従ってネーミングされています。

伊従 ちょっと補いますが、ホームページで教官の全員の研究内容が検索可能です。ただ、それは文部科学省向けの作文ですから、個々人の先生が何を研究している人かというのはそれでアバウトにわかりますが、授業でそのことを言ってくれるかどうかはわかりません。やはり研究の最先端と教育をする場合の内容とは必ずしも一致しない。できるだけ一致させようと努力はするんですが、追いつかないケースが多いです。全学共通科目は非常に入門編的な要素が強くなりますよね。ですから、人物像を知りたいければホームページに入って、アイウエオ順で教師の名前を見ていけば、理解しづらい文章かもしれないですが、個人のイメージはわかります。問題は授業ですよ。授業に関してはシラバスしかないというのが現状ですか。

山田 そうでしょうね。先生はずいぶん詳しいのを公開しておられるけど。

伊従 個人的につくってらっしゃる方はいらっしゃるけど、公式ページから入ってアイウエオ順で検索できるようにすでになっているはずですよ。欠けてる方はいないはずですよ。



教官アドバイザー制って、なに？

--- 教官アドバイザーとはどういうものなのでしょうか。

富田 今までは2回生で23専攻に分属しますね。その専攻の先生は、大きい所は10人ぐらいいますが、大体5~6人だったと思うんです。そうすると、どの先生の所に行ってもいいし、大体は学生と先生とみんなが知り合いになるという関係があったんです。だから、特にアドバイザーがいなくても、そこの主任なり誰かと相談したらいいということだったんですが、今度学系という大きなくくりになりましたら、先生自身がそこで何十人かの集団になりますし、学生さんもそれだけいるわけで、先生がそれだけ集まると、どうしても無責任になる。そこで、各学系に、2回生のとき、3回生のときに、それぞれ学生さんからの相談に専門に応じる先生をおこうというのがきっかけでした。1対1で学生と対応するのではなしに、学系にそういう担当の先生をおきましょうということでしたよね、確か。

山田 まだ結論は出てないでしょう。だけど、早く結論を出さないと。

元木 学生諸君が自由に選べるということですから、特定の先生だけを委員にするのではなくて、誰を指名してもいいということにしようという計画もあると思います。

富田 そうか。2つ案があってまだ結論が出てないんですね。4回生のときに卒業研究、卒業論文を書きますが、その担当の先生は指導教官ですね。だけど、2・3回生の間に相談相手になる先生をそれぞれ決めましょうというのがアドバイザーです。まだ指導教官が決まる前に仮の指導教官というか相談相手というか、ぼくらは昔は里親という言葉方をしたこともありましたがね。

元木 ですから、専攻が割とはっきりわかっている方は、将来この先生の指導を受けようという先生をアドバイザーにすればいいですし、そうでなければ、たとえば授業がとってもおもしろい先生にまずついて、3回生のときに変わる。指導教官はまた違う先生にしてもこれはかまわない。ですから、授業のこと、研究のことを相談するということがあります、学校生活とかいろんなことで話し合える先生、それがアドバイザーなんです。

富田 たとえば、自然科学をやりたいという学生さんがいて、物理に非常に興味を持って、どこかの大学院の物理の専攻に進みたいという人がもしいたら、その人が4回生になって物理の先生を指導教官にした段階で勉強を始めても、大学院はすぐ夏に試験がありますから、これは間に合わないんです。その人はもしもそういう意思があるのなら、アドバイザーに相談したら、「君、それだったら、ここだけの物理ではちょっと間に合わないから、こういう勉強をなさーいよ。理学部のこういう講義をとってください」とか、そういう相談には乗れると思うんです。就職を探すのだったら、どういう就職がよろしいですかとか、その辺が我々は一番苦手なところですけど、そういう相談にも乗らんといかんのでしょね。

--- 教育・研究指導だけでなく、学生生活全般にわたる相談に学生1人に対してある特定の1人が当たるということですね。

元木 1人に限るかどうかという問題もまたあるんです。学生諸君の中で、自分はこっちにも行きたいし、このことにも興味があるしという人だったら、複数の先生にアドバイザーを頼んでもかまわないということになるのではないかと思います。

富田 あるいは、学生さんのほうが決めかねた場合でも、専攻ごとに、物理系だったらある先生をおいて、その先生がもっぱら当たるという形にするかもわからないです。そのほうがやりやすいかもわからないですね。

(教官アドバイザー制度については、末尾の注をご参照ください。)

総人の理系 複合的な領域研究

--- 理系に関して、「理学部と総人の理系はどう違うのか」という質問がありました。

立木 理系全部のことは私にはお話しできないし、富田先生にフォローしていただこうと思いますけれども、私は数学と情報をやっていますが、今回、数学のかなり



の人数の先生方が理学部に移られた。数学の舞台は小さくなったのですが、これはもともと、教養部の1、2年生に数学を教える先生集団をひきずってきたからなので、総合人間学部という概念からしたら、適正な人数になったのじゃないかなと思います。別に数学がなくなったわけではないですから。理学部数学ほどではないですが、しっかりと数学をやりたいという人には対応できるし、卒業研究で本当に専門的に1人の先生の専門につくときに、今までだったらつけていた分野が今度から減る、それぐらいの違いだと思います。

理学部数学との違いは、なかなか難しいですね。まず、理学部数学でも、数学のすべての分野をカバーしている訳ではありませんし、こちらでしか学べない内容もあるわけで、専門的になった時に学べる内容が違うということがあります。特に、認知情報学系では、情報と数学が融合している。理学部というのは真理を追い求めるという理学的な価値観が中心ですよ。数学なら数学の古い伝統を引き継いでいて、その中だけを見ているという感じが強くて、片方、情報といったら工学部主体ですが、工学というのは人の役に立つものをつくろうという意識で学問そのものが成り立っていますから、お互いにある意味で相いれないところがあります。それに対して、ここでは数学的なことと情報的なことを一緒に行っている。だから、情報的なことに対して、普遍的なアプローチで見ている人もいれば、数学的なことを、もうちょっと応用的側面から考えている人もいます。それに加えて、認知情報学系や総合人間学部の様々な分野との境界的な内容はたくさんありますし、そう

いった、数学や情報に関して、外のところにも目の向いたようなこともできるというのが大きな違いだと思います。

そういう複合的な領域に入っていくことが容易な体制というのが総合人間学部の1つメリットですよ。

他学部とも競える専門性

--- 「複合的な領域研究」、それが総人のセールスポイントだと思うのですが、それに対して、むしろ「専門性が欠如していないか」という疑問がかなりあったのですが。

富田 専門性というのは、インターネットのフォーラムみたいな所を見てたら、「総人は専門がないやないか」というのはよく出てくるんですが、ぼくが前から言ってるのは、それならほかの学部は本当に専門教育をやっているかということなんです。理学部で本当に専門教育をやっているか、工学部で専門教育をやっているか。たとえば工学部なんか見てたら、本当に工学部らしい専門教育をやっているのは4年の最後の卒業研究ぐらいなんです。工学部の先生自身も「もっと広く基礎になる物理や数学をきちんとやっつけ」ということを推奨してるんです。そういう意味では、ほかの学部も、学部の4年間では専門教育なんてとてもできない、今の学部のレベルではとても無理だ、本当の専門教育は大学院でやる、そのための基礎をちゃんと身につけてこいというのが、今の方針になってるんです。そういう意味では、医学部はちょっと別だと思えますが、工学部、理学部、ほかの理系の学部なんかはほとんどそういうことになっております。だから、ここの今までの理系の基礎科学科を出た人なんかは、工学部の大学院とか情報学研究科の大学院とか、そういう所にどんどん出ていって、ちゃんとそこで太刀打ちできています。ただし、京大の工学部は、その講義をちゃんと受けてないと大学院に通れないような試験問題のようで、外からは入りにくくなっているんですが、東京大学とか東工大とかは学部よりも大学院が大きいので、どんどんこっちから行っているという状態です。大学院に行ったら、向こうの工学部の連中と一緒にちゃんと張り合っただけでいいです。それはここでちゃんと物理や数学やその辺の基礎をきちん

とやってるからなんです。だから、確かに看板として専門性は大事かもわからないんですけども、ほかの学部で専門教育をやっているかといったら、そういうレベルだということなんです。ちょっと極端かもわかりませんが、卒業研究ぐらいが独自の専門教育になっているんじゃないかという段階だと思います。

総人は暴れるための箱

富田 それと、さっきの理学部のことですけど、こちらの教員の構成とか並べている講義科目は残念ながらミニ理学部。ミニ理学部というのは、この京都大学の理学部に比べたらということで、ほかの小さな大学の理学部に行きましたら、総人の理系の先生よりは少ない規模で構成しているような所もありますから、そういう意味ではミニというよりミディか、もうちょっと大きいんじゃないかと思いますが、ただ、皆さんにやってほしいのは、もちろん物理を専門にする、化学を専門にする、そういうことに興味を持ったらそういう勉強をしてもらいたいんですけど、理学部と違うのは、勉強してもらおう視点として、自然科学を現代文明の中に位置づけて、人間にとって科学というのはどういう意味を持っているのかという視点で物理とか化学を勉強してほしいというこちらからの注文があるんです。ですけれども、教える先生のほうは、化学をやりたいのならもっと化学を勉強せえ、生物をやりたいのならもっと生物勉強せえと、文系の先生でもそうですけど、非常に狭い範囲でしっかり勉強してこいと、親のほうは言うんです。ですが、皆さんにはもっと暴れてほしいんです。物理と生物はちゃんとやって、新しい生物学を開発するとか、もっと物理をきちんとやって地球科学をやるとか、そういうふうには暴れてほしいんです。暴れられるようちゃんと枠組みはつくってあるんです。だけど、先生のほう、親のほうは、もっときちんとこちらの方をやれということ、昔からの伝統で言います。それに逆らって、子どものほうはもっと暴れて、これからの広い知識を身につけた、広い基礎を身につけた専門家になってほしいんです。そういう理念の違いがあります。理学部は1世紀近い歴史を持っている所ですから、その理念に基づいた専門で教育をやってきましたが、理学部自身も最近はずっと同じように、学部は非常に広い系

にしましたね。10年前からみれば、双方が非常に近づいてきているんじゃないかと思えます。



杉万 総合人間学部というのは、総合人間学という学問というか、ディシプリンがあるのではないと思うんです。ひとつの場というか、箱というか、それに対する名称だと思います。その場、その箱の中

で、先ほど富田先生もおっしゃったように、おおいに暴れまわってほしい。富田先生は物理学、生物学、地球科学をあげられましたが、ぜひ、文と理をまたいで暴れていただきたい。日本文学を主専攻にしてるんだけど副専攻は物理学であるとか、あるいは立木先生のところでコンピューターを主専攻にしてるんだけどヨーロッパの歴史が副専攻であるとか。ぜひ、文理をまたにかけて、そのくらいの暴れ方をさせていただきたいと思えます。

伊従 もう出回ってないかもしれないんですが、総合人間学部が改組される準備運動みたいな形で、「21世紀における知の統合をめざして」というシンポジウムを平成12年に行ったんです。どこかその辺に落ちているかもしれませんが、そのときにお話したことを簡単に申しますと、さっき専門性という話が出ましたが、学部で勉強することが専門とは呼べない段階にすでに来ていることは、皆さん常識として考えていただいていると思います。社会に出る人も研究する人も、その後のためのフットワークと体力をつけておかないと、要するに自分の知識と知恵の広がり後で差を生みます。だから、このたかだか4年の間で専門みたいに見えることだけをやっていても、10年後20年後どうなるかわからない。この頃の賞を受賞した人の体験談とかを聞いているとおわかりのように、失敗とか脱線から学ぶケースが多いんですよ。ですから、総合人間学部では、かっこつきの専門ですが、それを全くやらずに済ませることはできませんから、トレーニングの意味も兼ねて、それなりに焦点を持って勉強されることはいいと思います。しかし、それを限定してしまうとよ

くない。私は工学部建築科の出身ですが、私たちのように30年ぐらいそれで走ってくると、ほかのことに興味を持っていたかどうかでかなり差がつくんです。これは事実です。たとえば発想力とかが全然違います。

ですから、いま君たちの段階では非常に不安で、専門をやらずに何ができるのかなあと思っているかもしれませんが、はっきり言うと、4年程度の勉強でそんな悩みはほとんど不要と思ってもらっていいと思います。ただ、自分のテーマを持って、ある焦点を持って勉強することが大事だと思います。資格をとるためにあれもこれもということではなくて、何かしようと思って、そのために助けとなるのが副専攻、主専攻という枠組みだと考えてもらっていいんじゃないでしょうか。

--- 副専攻はいつ決定するのですか。

山田 これまでは2回生になって春に履修登録をするときには確か欄外にそれを書く欄があります。だけど、都合によりと言って後から変えるのはもちろんおおいにあり得る。途中でいろいろフォローがあります。副専攻の単位はこれまでこれだけ揃っている、あとはこれこれを今年度とりますからこれで副専攻をとりますというのが、4回生の履修登録のときですね。ですから最終的には卒業のときです。

--- 分属のときに人数制限などはあるのでしょうか。

山田 もし130人の学生諸君が全員自然科学系という希望を出したら、そのまま放っとくわけにはいかないと思いますが、従来の4学科は学科ごとに定員がオフィシャルには決まっていたんですけども、実際に各専攻に分属するときには、たとえば私が属していた人間学科ではオフィシャルな定員は20人だったんですが、毎年50人以上いたんですよ。特にその中でも社会システム論という専攻は毎年20数人、場合によると30人いたけれども、あそこは一度も制限するというをおっしゃらなかったんです。唯一、場合によると制限したいとおっしゃったのは杉万先生の所です。人間情報論専攻希望者が毎年非常に多くなって、だけどその年は事前に予告してなかったから「今年は受け入れます」と

おっしゃった。ですから、5つの学系に分かれる段階で希望どおりにならないということはまずあり得ないのではないかと、これはぼくが勝手に予想しているだけですが、従来の例からいってもあり得ないと思います。

--- 卒業論文を書くときの指導教官の場合はいかがでしょう。

山田 それは制度としては何にも決まってないですね。これまででも何も決まってないから、もし卒業生が10人も来られたら、あるいは何かをなさる先生がないとは言えないです。でも、どこでもそういう状況をこれまで想定していなかったということでしょう。たとえあったとしてもそれぞれの専攻に一任だったと思います。だから、ひょっとしたらこれまででも希望の先生につけなかった人があるかもしれません。だけど、それは教務委員会とか教授会とかのレベルまでは全然出てこなかったんです。それぞれの専攻の中です。私が属していた生活空間構造論専攻は、伊従先生も一緒ですが、そこはそんなことは一度もしませんでしたね。学生諸君の希望どおりにしてました。

富田 物理はむしろ人気がなかったから。(笑)
やはり人間の興味というのはそんなに偏ることはないんじゃないかと思うんです。今まで心配はありましたけど、そんな極端に集中して断らんらんといい先生はなかったんじゃないかと思えます。ラーメン屋と一緒に、あそこは安くてうまいと行って行列するのと、比べてみてちょっと高いけどこっちへ行こうとか、そういうふうみんなが選択するんじゃないんですかね。自然にそうなるんだと思えます。その点は今からも心配ないと思えます。

--- 総人での勉強はその後の仕事や研究でどのように生かされているのでしょうか。

富田 ほかの学部と比べたら、起業家というんですか、ベンチャーをつくって自分たちで経営しているような人もけっこういます。それから総合にこじつける意味ではないけど野村総研とかね。特にほかの学部と比べて特徴があるかと言われたら、就職に関してはそうないですね。ぼくらはつくったときには、むしろもっと公務

員とか高校の先生とか、高校の先生なんかは今では教育系の大学では言いにくいですが、なかなか専門家を養成しきれてませんから、こういう所を出て理科の先生になってほしいなと思ったんですけど、あんまりないですね。期待したほど出てないです。

元木 外交官試験なんか時々通りますね。

山田 公務員は国家も地方も含めてけっこう進出してると思います。ぼくは文学部で地理を勉強したわけですが、ぼくらが学生だった頃は、あるいは最近でもそうかもしれないけれども、文学部ではあんまり公務員試験を受けようかという指向はなかったですね。だけど、ここの総合人間学部では、ぼく自身の指導生でも地方公務員上級というので何人か行ってます。それはすぐ隣の専攻に社会システム論というのがあるって、そこでは法律・経済・政治というあたりを主に勉強しているので、そこらの影響もあったかもしれないです。そういう進路が自分たちとは縁遠いものだという意識を持たなかったんじゃないかな。

富田 たとえば、副専攻で障害児問題をやった上で司法試験を通過して、私は障害児問題専門の弁護士になるんだという人もいます。それは非常に模範的というか象徴的な例ですけどね。ぼくとこの学生では、人間関係を副専攻でとった上で情報科学をやって、人間工学のほうに大学院は行きました。結果的には電気系に就職しましたが、そういう選択はけっこうあるんじゃないかと思えます。

それから学部は文系の専攻だけ大学院は理系に行ったとか、逆の人ももちろんいますし、それはけっこういます。それはやはりここの特徴ですね。

元木 公務員なんかでもいろんな部局に回されますからね。たとえば理科系出身だけど福祉に回されることもありますし、そういうときに対応しやすいという面はあるだろうと思います。

総人を出た学生で、模範的と言えるのかどうか分かりませんが、いかにも総人らしい、あるいは、総人のよさを体現してる人がいます。今年度で人環の大学院を終えるんですが、その人はもともと私どものところへ来て古代中世史を

やろうとしていました。こちらは頭が硬いですから、「しっかり専門の勉強をやれ。専門の本を読め」とか言うんですが、彼女は批判的に相対化するんです。「確かに先生方がやっていることもおもしろいかもしれないけれども、私の関心はもっといろいろある。先生方の方法論とか論理の立て方は勉強させてもらおう。しかし、自分の関心のあることを自分でやる」ということになり、結局民俗学を専攻しまして、民俗学・宗教学の関係で博士課程を終えるんです。

ところが、今の世の中ですから、民俗学を活かせる職場がすぐに見つかるわけがない。そこで彼女が見つけたのが戦国時代の豊臣秀吉の文書を扱う博物館で、そこの公募があって嘱託に採用されました。こっちは大丈夫かなと思ってたんですけども、今やその博物館では貴重な戦力だとのことで、いい人を紹介してもらって非常に感謝されました。

そういうふうに、1つの枠にはまってそのことしかやらないというわけじゃなくて、それに対して相対化しながら、何でも貪欲に受け入れるという考え方がありますから、成功したのではないかと思います。そんな例もあります。

だいたい一般企業でも、最近はマニュアル的な人間、こうだからこうだというふうなことしか知らない人は困るというんです。あるいは、先ほどから話題になっていますように、たとえば自分は法学部を出て憲法をやりましたと言っても、そんなことを企業はハナから相手にしないのであって、脱マニュアル的と言いますが、自分でものを考えるとか独自の発想ができるというのが大事にされるわけです。そういった意味で、副専攻もあって知識も多いし、枠にはまらない、柔軟な考え方ができる総合人間学部は非常に有利なポジションではないかという気がいたします。

杉万 たまたま一昨日訪ねてきた卒業生がいます。彼は私の専門である社会心理学が主専攻だったんですが、副専攻が立木先生のところの情報、コンピューターの分野でした。今、IBMに勤めています。最初の1年2年ぐらいいわゆるSE（システムエンジニア）の基本的なトレーニングで鍛えられたみたいなんです。しかし3年目ぐらいになると、ああいう大手の企業になると子会社をいっぱい抱えていて、どこかの銀行のシステムを開発するというとき

も、実際の個別のプログラミングをするのは子会社がやるので、結局彼が何をやっているかという、銀行の人と話をして、銀行の業務を聞きながら、それを、コンピューターの言葉に置き換えているんです。さらに、置き換えながら、こういうふうに銀行の業務を変えていったらどうですかという提案までしてるというんです。そうなってくると、本当に幅広く学んでおいたほうが勝ちという感じがします。

--- 就職のサポート体制などはあるのでしょうか。

元木 学生生活委員ですから、私のほうからお答えしますが、基本的には、便覧にもごさいませけれども、教務係の方に対応していただくことになっております。でも、ただ話をするだけでなく、様々な行事も予定されています。たとえば、近々11月27日には--- まだ学系制になってませんから各学科からということになりますが--- 各学科の卒業予定者で内定をもらった人たちに来てもらいまして、いつ頃から就職活動を始めたかとか、内定をとるにはどうすればいいかとか、そういった体験談を聞く機会を設けることになっております。こうした機会はぜひ活用していただきたいと思います。もうすぐに就職活動を始めるという方だけではなくて、1回生の諸君にも聞いてもらったら役に立つと思います。

それから進路指導室を設置しております。専従の方が抜けられて、後任の方が補充できないということで一時鍵をかけたんですが、今はオープンにしていますので、自由に資料などもご覧いただきたいと思います。去年まで進路指導室におられた方は、学生部のキャリアサポートセンターに移られました。これは全学的な就職その他のお世話をしていただく所なんです。もちろん全学ですから、総合人間学部からもそこへ行っている指導を受けていただければと思っています。

富田 工学部を目の敵にしてるんじゃないんですけど、工学部はさすがに長年の人脈で有名企業に入り込んでいってるんです。そうすると、企業から研究室というか講座に指名がくるんです。「今年は何人学生をくれ」という格好です。ですから、その研究室におれば、自分さえ行



こうと思えば就職は保証される。そのかわりに非常に断りにくいという面もあったりしまして、就職は保証されているかわりに自由度もない。どっちがいいかはわからないですけれども、残念ながら我々の所は10年と歴史が浅いので、我々自身が一番企業に縁の遠い理学部・文学部出身者が圧倒的なので、企業にそういうコネもない。悪いですが、そういうことです。就職に関してはほかの文系の学部と同じようなレベルだと思います。だから、これではだめだということで、全学的にキャリアサポートセンターというのを、私学と同じようにそういうものを設けることになったんです。

--- 総人の長所って何でしょう？

伊従 魚が水のありがたさをわからないのと同じように、人間は空気があるのは当たり前で、空気のありがたさがわかりませんよね。総合人間学部は、その意味でおそらくいる間に本当によかったというのがわかりにくい所かもしれません。それはそれだけ抵抗がないからでしょうね。君たちは何をやろうと思っててもできる可能性があるし、実は、全学共通科目というシステムが一番ダイレクトにタッチしている教師が多いのがこの総合人間学部ですから、一回生からつき合いが始まる。ですからそこを通じて必要ならば「他学部のこの科目をとってきなさい」と、これは外注と言ったら悪いんですが、不足する部分に関してそういうアドバイスもできるわけです。大学が法人化するとどうなるかわかりませんが、学部によって授業料が変わ

ってくると、いわゆる教育を受ける権利がどういうふうに扱われるかは、君たち自身の利害として注目してほしいんですが、そういう大学の一番いい所を全部利用している学部はここを除いてほかにはないと思います。それはそれを行使してみないとありがたさが見えてこない。ただいだけではわからないんです。だから、ぜひカードは使ってくださいというのが私の言い方です。

立木 これまでの話で、総人の持ち味として、複合的、総合的な視点という話が多いでしたが、私から見れば、総人の最大の持ち味は、専門教育だと思います。ここでは、分野によってかたよりはありますが、平均すると、先生と生徒がほとんど1対1なんですよね。卒業研究になったら、ほとんど1対1で指導してもらえる。そこのところで深い専門教育ができていますと私は思うんです。だから、卒業研究はほかの所よりも充実していると思います。

専門的内容的にも、今まで、総人のいい環境の話はいろいろありましたが、それはそのまま教員が研究をすすめる上の環境でもあるわけで、ここの先生方は、教養部の時代から、既存の学部や学問の枠にとらわれることなく、自由にいろんな挑戦をしているんな壁をぶち破って自分の研究をすすめて来られた方ばかりです。オリジナリティに富んだ、ここでしかなしえない様な研究をされている。

ですから、先生方の専門に関する内容を学ぶことも、先生方から研究のすすめ方や研究の哲学みたいなものを学びながら自分の研究をすすめることも、総人でしかなし得ない、最大の持ち味だと思います。今の時代、専門教育は大学院に入ってからというお話もありましたが、今回の改組で総人は人環の大学院と一体化したということですし、学部教育で興味を持った人は、どんどん大学院の方にすすんで欲しいと思います。

もう一言、言わせてください。いろいろつまみ食いしているんなことをしてほしいという話もありましたけれども、いろんなことができるというのは、何もしないで終わってしまうと

いう可能性も高いですね。以前にも小さな学部カリキュラムの改変があったのですが、その前は数学と情報は別々の専攻で、その後、数学と情報が一緒の専攻になりました。それまでだったら2年生から情報の学生なら情報の学生という具合にわかって、顔と名前を覚えて、4年生の卒業研究はどういうことをするのかなあと、2年生から気をかけて見ていたわけです。それが、数学と情報が一緒になったことによって、たとえば、あまり熱心に情報の授業を受けているように見えないし、たぶん数学のほうにいくんだろうと私が思っている学生が、数学のほうでは、あまり数学できないし情報にいくんだろうと思われていて、4年生になる時に、はじめて「立木先生、卒業研究をお願いしたいんですけど」とか言われて、あっけにとられるようなこともあるのです。細かい専門に分かれていたほうが、はるかに安全に、ところてん的に、あるレベルをクリアした卒業生を生み出すことができます。この学部はより高い理想をかかげた訳で、自由を与えられた学生の方は大変でしょうけれども、いつになっても何を研究していいかわからないということのないように、これと決めるものがあつたら、とことんやってほしいなと思います。

また、教える方も、今までの細かい専攻に分かれていたときにできた教育よりもレベルが下がることは、皆さん望んでないと思うし、学生の方も今までうまくいったものを、急に大きく変える冒険の実験台になることを望んでないと思うのです。だから、学系へと、仕組みは変わりましたが、当面は、実質的にはそれほど変わらない面は残ると私は思っています。たとえば、学系の中に科目がクラスターに分かれた「関係」というもう1つ下のレベルのものがあつても、それが今までの専攻と近い意味をもつので、「関係」という単位で学生の面倒を見ることも場合によっては必要だと思うんです。

「関係」というのは制度的にはないんですけど、たとえば化学のほうに行きたいとかいったときに、実験の仕方だとかいろんなものを積み重ねてないと、4年生でいきなり専門的な研究はできませんよね。それぞれの学系によって違うと思うんですけど、そういった密接に関係を持った科目群というのは存在していて、先生方も密に連絡をとりあう必要があつて、制度的

にはともかく、実質的には、「関係」は、ある程度の単位として残ってくると思うんです。そういったところを踏まえながら、アドバイザーの人の話を聞きながら、勉強をすすめていってほしいと思います。

元木 来てよかったと思う面を話せということですが、よかったと思うかしまったと思うか、これは本人の心掛けにもよりますのでね。あれこれできる自由さがあるのはいいところですが、それこそ「自由からの逃走」という本もありますように、自由であるがゆえに何していいかわからんということになる。自由であるから主体的に積極的にあれこれ考えればそれは素晴らしいことになるし、自由であるからまあ放つといたらいいや、モラトリアムの延長だというふうに思えば、ものすごく後悔することになるし、そこは心掛けの問題ではありますが、自由であるからということにも対応できる。

だから、複数のことを勉強してジェネラリストになって、脱マニュアル人間を求める企業に入って成功することもできるし、研究者としても学際研究の分野を自分で見つけて発展することもできるし、逆に、立木先生も言われたように、むしろあれこれ悩んだ末に実は一番おもしろいのはこれだ、と決めて、1つの分野 --- たとえば日本史 --- をやろうと思う人が来てくれたら、それもおおおいに結構です。

少人数教育のよさだとおっしゃられたけど、そのとおりで、具体的に言うと私は3回生諸君に古文書をたくさん読ませています。文学部の場合は1学年に20人くらいおまして、私が受けた古文書演習では、ポーンと巻物を置いておまえら適当に読めという授業でした。せいぜい1回2枚ぐらいしか読みませんでしたけれども、私の総人の授業では1回に10枚ぐらいのコピーを配って、学生諸君に読ませるようにしています。だから、3回生が終わった時点の学力は絶対上だと自信があります。こういう専門教育も受けて、スペシャリストでも成功できる可能性もあると思うんです。

しかし、主体的に考えてそうしようと思ってくれないと、私がいくらこうやれと言っても何にもならない。「煩い教師がいてひどい目にあつた。あんな所には行かないほうがいい」なんて言われたら、こっちは困りますが、積極的に考えてくれれば、いろんな可能性があり、どん

な分野でも成功できる、そんな素晴らしい可能性のある学部だと認識しておいていただきたいと思います。

杉万 先ほどちょっと申し上げたんですが、とにかく文理をまたにかけての勉強は総人でできないんです。いくら京都大学中駆け回ればできるじゃないかって言っても、それは実際やってみると不可能に近い話であって、それがこの総人の中ではできるわけですから、これを利用しない手はない。

それから、私は他の大学を経由して京都大学に赴任しましたのでわかるんですが、総人の先生を含め京都大学の先生は、単にその先生お一人だけでも立派なだけけれども、その背後にもすごいネットワークがあるんですね。それは、ほかの学部、研究所へのネットワークであったり、あるいは国内のほかの大学、あるいは海外、いろんな所にネットワークがあるんです。だから、目の前にいる人物もさることながら、その裏のネットワークのすごみというのがあって、それはその先生と真近に話をしたり、接しないと、それをかいま見することもできません。だから、決して遠慮などせずに、「たたけよ、さらば開かれん」ですね。各先生の研究室はなかなか訪問しにくいというか、抵抗を感じている人も多いと思うんですけども、今は皆さんメールアドレスもオープンにされていますから、遠慮せずにメールでアポイントをとって、図々しいくらいに訪問されたほうがいいと思います。

山田 ともかくこの学部はまだ10年しかたっていないんです。伝統は確かにほかの学部と比べたらないかもしれない。だけど、その分、君たちが総人の伝統をつくる立場にある。それは単に歴史が短いということだけではなくて、これはさっきからほかの先生がおっしゃったことですが、どういふ勉強をするのかということにかけての自由度がずいぶん大きい。おそらく、特に一番最初に富田先生がおっしゃった例からすると、工学部あたりと比べると、あるいは文学部と比べてもそうだと思いますが、本当にかなり広い範囲で学生諸君自分たち自身の主体性でもって勉強ができる。その分我々が提供する定食は全然ないかもしれない。だけど、アラカルトメニューの豊富さは相当あるはずで、それを君らが自分の関心に応じて自分でカリキュ

ムを構築していくというようなことが、かなり自由にできるわけなんですよ。それはプラスの面7~8割、危ない面2~3割ということだと思いますけど、やはりプラスの面のほうが多いだろうと思います。

マイナスの面もあえて言いますと、極端なことを言えば、本当に自分のごくごく狭い関心の部分だけで全部だっただけ揃うことがあるんですよ。副専攻を非常に近い隣りの学系にするというようなことをやれば、120何単位ほとんど狭い所で固めることだっただけ可能なだけけれども、まあ、それはせっかく総人に来たのだったらあまりしてほしくないなと思います。確かに卒業論文、卒業研究を絶対しなきゃいけませんから、何かの専門はどうしてもしていただかないといけないわけですが、あとそれをどういうふうにやっていくかというあたりで、自分たちでつくるカリキュラムというように考えていただくとありがたい。だから、逆に、あまり制度のほうに、あるいは教官のほうに期待されると、こんなはずじゃなかったと思われるかもしれないです。それにカリキュラムは自分たちがつくるんだというのが、ある意味では一番京都大学らしいところかなという気もしています。

道なき道を切り拓け

富田 入学試験で、前期は理系55文系55というとり方をしていますね。あれは入ってから理系を選びなさいよ、文系を選びなさいよという意味ではなしに、皆さんの受験勉強を一応軽減するためにどちらかをもつばら勉強して入学試験を受けたらよろしいという意味で分けているんです。総人ができるときにむしろ理系・文系の一番ヘビーなところをとって和集合の試験をやろうという意見も実はあったんですが、それをやるとちょっと負担がかかりすぎてむしろ敬遠されるんじゃないかということで、受験勉強としては一応分けて、理系か文系かで勉強してもらおうということで学生をとっています。だから、どちらで受けたからどの分野へ進まんなんという制限は全くないということです。

入ってよかったのか悪かったのか、もし入学式の日学部長から「今日は具合悪いからかわりに挨拶せえ」と言われたら言いたいと思っていながら、10年間言う機会がなかったんですけど、(笑)まず「入学おめでとう」というのは、

これは慣例ですから言わんならんですね。その挨拶をした上で、「しかし、大変な所に入りましたね。ほかの学部の連中は明日から羽を伸ばして遊びよ。君たちはそうはいかないよ。この学部はルールもないしエスカレーターもない。自分で何に向いてるのか、何を勉強したいのか、それを1年かけて今から自分の頭で考えていかんならんよ。そういう意味では明日からは遊べないよ」と言おうと思って、一回も言う機会がなかったんですが、そういう学部だと思ってほしいです。ほかの学部は、極端に言うと

ルールが敷かれているわけですよ。エスカレーターがあるんです。ここは自分でそれを見つけないといけない。そのかわり、受験勉強という非常にシビアな時期にそのことを考えなくていい。とりあえず受験勉強から解放された精神的にゆとりのある段階でそういうことを真剣に考えることができる。その点ではいい学部だと思います。だけど、遊べないはずですよ。

2003年10月17日
総合人間学部 1号館1103号室

注：教官アドバイザー制度については、その後の議論で、以下のようにまとめました。

「教官アドバイザー制は、主に2・3回生の時に履修等の相談をする教官を学生の希望により指名する制度です。教官アドバイザーは原則として学生が所属する学系の教官が担当し、そうでない場合は、所属する学系の教官が副アドバイザーとして担当します。

学系分属本調査（1月）と同時に、教官アドバイザーの希望調査が行われます。

一人の教官に希望者が集中した場合は、学生の意向を聞いて調整することがあります。」

< 研究・教育活動紹介 >

外国語獲得に近道はあるのか

中森 誉之（認知情報学系）

What is honour?

A word.

What is that word, honour?

Air.

(Henry Part , Act , Sc, 1. William Shakespeare)

人間の口から発した音が、空気の振動で伝わり人を動かす。人の営みの連鎖となり歴史は紡がれる。高校3年生の時に会ったこの1節が私の進路を決めた。言語学へと。

言語は規則体系をもった音や文字の集合体と考える。脳の中に存在する概念を単語に変換して、体系的に配列し、音や文字として発信する。発信された言語は、受信者にインパクトを与え、概念化される。

私の研究領域は、日本人学習者の英語の獲得過程を解明することである。その上で、言語処理の認知論的考察に基づく立場から、英語の獲得を促す指導理論を構築してきた。学習者にとって習得困難な時制及び関係代名詞の解析と指導法、動詞の意味及び形式の習得に関する研究、音声規則獲得と指導に関する実証的研究、語用論的立場から外国語コミュニケーション能力の獲得と指導に関する研究を行ってきた。

日本の英語教育界では、イギリスやアメリカで提唱された言語習得理論を基盤とした教授法を、教育現場に紹介するものが多かった。こうした教授法には、英語を母語とする環境における言語習得の理論が背景にあり、英語圏への適応を目的として開発されてきた。しかし、英語を外国語として学習している日本人英語学習者のために効果的・効率的な指導理論を提唱するには、外国語処理能力向上過程や、外国語獲得順序に関する十分な基礎研究が必要であると考えます。

成人外国語学習者が直面する問題は、百科事典的知識と言語技術の不均衡である。自らが表現したい内容を外国語で円滑に発信できないこ

とにある。この問題を克服するには、推論能力に支えられた外国語運用能力の育成、母語のレベルに近い語彙力と外国語の慣用表現運用能力の定着

母語を介在させない高速外国語処理能力の体得である。私は、これらを可能にする指導法のひとつとして、Lexical Approachを開発してきた。Lexical Approachは、人間の持つ推論能力を積極的に用いることによって、コミュニケーションを成立させようとする、認知科学理論に基づいた指導法である。記憶された固定的表現（チャンク）による意思伝達から、言語レベルの向上まで、一貫性を持って指導するための理論である。

人間の乳幼児は、周囲で話されている言語を本能に従い無意識に習得できる装置が遺伝的に備わっていて、認知発達段階に応じて言語も発達するといわれている。では、母語を習得した学習者も外国語を同様に獲得することができるだろうか。現在の仮説によると、成長に伴い脳機能が特定化・限定化され、外国語は母語習得とは異なる装置で獲得されるといわれている。成人の学習には動機要因が鍵となる。

学生から、「外国語を使えるようになるための近道を教えて下さい」と、よく質問される。まわりを見渡せば、「あなたはすぐに英語が流暢に話せるようになる」と、まじないのごとくうたい文句が氾濫している。外国語は情報収集や意思疎通のための手段であり道具であると考えます。道具を獲得するためには、脳の中に新しい外国語処理のための装置を作り上げなければならない。どのようにして。根気と努力以外の答えは見つからない。

（なかもり たかゆき）



カメラ・オブスクラと不在の实在感

加藤 幹郎（人間科学系）



サンタモニカにカメラ・オブスクラが建っている。陽光溢れる海浜リゾートなら、かつて世界中いたるところにあったカメラ・オブスクラが椰子の木陰に隠れるように建っている。太平洋に突き出た近くの棧橋には賑やかな遊園地があり、もはや誰からも見向きもされなくなったこの小さな映像娯楽施設は、私にとって文献で読む以外、初めての本物の（博物館に再現されたレプリカではない、まがりなりにも19世紀から生きのこった）カメラ・オブスクラである。テント式カメラ・オブスクラでも、書物式カメラ・オブスクラ（「宇宙劇場」）でもない、ベルトルッチの映画『革命前夜』（1964）に出てくるような、その中に入ってゆける一軒の立派な建物式カメラ・オブスクラである。数年前、ハーグに保存されている巨大パノラマ館を訪ねたときにも感じたことだが、これらの初期視覚娯楽施設は、文献で読むのと実際に訪れるのとでは、その印象をまったく異にする。カメラ・オブスクラはその名が示すように、写真史や写真原理を解説する書物ではかならずと言っていいほど言及される、ごくありふれた映像装置=施設である。しかしながら、私にとってそれは写真の起源というよりも、むしろ正確に映画館の起源であるように思われた。実際、写真の起源という言い廻しが、もし永遠に凍りついたモノクロ静止画像を想起させるとすれば、カメラ・オブスクラの実体（すなわちカラー動画像をスクリーンに投射する最初の映像装置のひとつであるという事実）を忘却していることになる。はたせるかな仄暗い建物（カメラ・オブスクラ）の内部に入ると、床から突き出た直径1メートルほどの円卓が闇のなかに光っている。その光り輝く円

卓が外界の景色を写すスクリーンである。なぜスクリーンが丸テーブルなのだろうかと思っていると、やがて暗闇に目が慣れてきて、テーブルのかたわらに舵輪のようなものが立っている。なるほどこれを廻すと、天井から屋根に突き出た潜望鏡のような恰好の集光レンズが廻り、建物の周囲360度の光景を写し取る仕掛けである。連れに舵輪を廻してもらいながら、私はかつてパノラマ館でそうしたように（ただし今回は非常に小さな円周を）ぐるり回遊しながら風景のパノラマを眺めた。動く風景に合わせて、自分も円卓の周りを動きながらスクリーンを見つめていると、不思議な気持ちに襲われた。たしかに風に揺れる椰子の葉も、打ち寄せる白い波も、海岸通りを行きかう車や人の姿も見える。しかし私を驚かせたものは、それらが私の両腕に収まるくらいのミニアチュールとして無音で動いているということである。それはふだんカメラ・オブスクラの外で目にしている光景とまったく変わらない非常にリアルなものである。唯一の相違点は、大理石の円卓のうえに見える「現実」は、そこには実在しないということだけである。レンズと鏡というメディアがもたらしたこの不可思議な感覚をいま不在の实在感と呼ぶことにすれば、手をのばせば届くところに見えていながら、それが実在しないというある種の喪失感と諦念、それこそが映画であれ写真であれDVDであれ、すべての映像メディアが本源的にかかえ込むことになったステディウムである。なるほどそれが実在することを確かめたければ、カメラ・オブスクラの扉を開けて明るい戸外に出ればいい。しかし私たちはいつのまにか、どの扉を開けても、もはやどこにもその実在が見あたらない、そんな永遠のカメラ・オブスクラのなかにみずからを閉じ込めてしまったのではないだろうか。

（かとう みきろう）

ブラックホールを造って“聴こう”

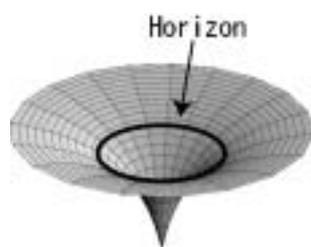
阪上 雅昭（自然科学系）



1915年は、アインシュタインが一般相対性理論を発表した記念すべき年である。著名な物理学者であったエディントンが、“この理論を理解できる者は世界中で3人しかいないだろう”と述べたとい

う有名な逸話がある。

しかし、その数学的手法の難解さを除けば、ニュートンの重力理論から一般相対性理論にいたる過程は、アインシュタインという天才のなせる技であり、その論理は極めて明解である。実際、翌1916年には、シュヴァルツシルドによりアインシュタイン方程式の解（シュヴァルツシルド解）が発見されている。むしろ私にとって非常に興味深いのは、42年後の1958年になって、物理学者はようやくシュヴァルツシルド解がブラックホールを表していることを理解するに至った点である。当然のことかもしれないが、方程式を解くよりも、その意味を理解することの方が遙かに困難なのであった。



では、ブラックホールとはどのような時空なのであるか？図のような埋め込み図が便利である。図を画き易くするため私達の住む空間は3次元ではなく2次元としている。中心にあるブラックホールの質量のために周囲の空間が湾曲していることが表されている。図中のHorizonの内部からは強い重力のため光すら脱出することができない。この部分がブラックホール領域である。実は、図のようなブラックホールでは、時空が中心に向かって落ち込んでいる。さらに、

Horizonで、その落下速度が光速に達している。そのためHorizonの内部から外向きに光を発しても時空そのものが光速で落下しているため光ですら脱出することができないのである。

このようにブラックホール時空は、物質やエネルギーを吸い込むだけの存在だと考えられてきた。しかし、一般相対性理論と並ぶ20世紀の物理学の最大の成果である量子力学を適用することで、ブラックホールはエネルギーを放射し蒸発するという驚くべき現象がホーキングにより予言された。これは彼の名を取りホーキング輻射と呼ばれている。言うまでもなくホーキング輻射はブラックホールの概念を根底から覆す興味あるもので、是非にも観測したい現象である。しかし、予言されている温度があまりに低いため、観測の試みすら行われていない。

さて、ホーキング輻射の温度が低い理由は念頭に置いているブラックホールの質量が太陽程度以上と大きいことである。それなら、“もっと観測の容易なブラックホールを実験室で造れば良い”ということになる。さらに発想を転換しよう。今まで考えていた時空を流体に、光を音に置き換えて見よう。すると流体が加速されその速度が音速に達する場所（音速点）が生じると、その向こう側からは音が伝搬してこないことが容易に想像できる。これが音に対するHorizonすなわち音のブラックホールなのである。

幸いなことにこのような音速点をもつ流れは実験室で簡単に実現することができる。そこで音のホーキング輻射も観測できるであろうと強く期待し、京都大学工学研究科の吉田英生教授と実験を進めている。近い将来ブラックホールの輻射ならぬ“ブラックホールの声”を聞くことができるだろうと確信している。

（さかがみ まさあき）

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会